



「脊髄係留症候群」という難病と闘いながら、絵をとおして多くの人に癒しと希望を与えている福智町在住の画家・さやのりこさん。美しく躍動感あふれる作品の根底には、福智町の自然の美への感謝と、これまで出会った人、そしてこれから出会う人を慈しむ温かい愛が旋律のように流れています。



絵を描くときは、クラシックやヒーリングミュージックなど好きな音楽をかけるとのこと。穏やかに神聖な空気がさやさんを包みます。

キャンバスの向こうに、希望の光を届けたい。

ゆつくりとその手に筆をとり、静かにキャンバスに向き合います。鮮やかな色がのせられると、下絵の花や蝶たちが、まるで躍動するかのように生き生きと浮かび上がってきました。

20代のときからエステティシャンとして女性の肌と心を癒していたさやのりこさん。しかし突然36歳で「脊髄係留症候群」という難病を発症、手足が自由に動かない生活が始まりました。「もう人を癒せない。それが何より辛かった」。

絵筆をとったきっかけは、知人の「生きて証を残して」という言葉。「昔から絵は好きでしたが、もう上手に描けないと思っただけでした。病気になるまで最初に絵を描いたときは、仕上がりに納得できず『私の絵じゃない』と泣いてしまったほど」と当時を振り返ります。

それでも、「絵を待っている人がいる」という思いが沸き起こり、つき動かされるように描き続けたさやさん。インターネット上の交流サイトに発表した作品が大きな反響を呼び、国内外に瞬く間に広がりました。現在は全国各地で個展を開催するほか、作品はペルーの美術館にも所蔵されています。

色鮮やかな楽園のようなさやさんの抽象画は、花や鳥などが伸びやかに描かれ、「音を奏でる絵」とも評されます。「3歳で北九州から福智町に移り住み、緑の美しさに魅了されました。その記憶や福智への愛が、作品に投影されているのかもしれない」。

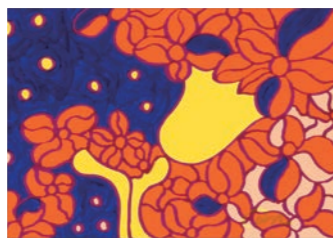
病気がかかったことを、さやさんは「病を得た」と表現します。「いつ意識を失うかも分からない今、自分が見えない力や深い愛に包まれて生きていることを日々感じています。ふだ



出身校でもある方城中学校の美術部員と、絵を囲んで交流も



握力の弱い人でも握れるユニバーサルデザインの絵筆を使用し、想いを描くさやのりこさん。「描く前は何もイメージしていませんが、キャンバスに向かうとモチーフや色が浮かんでくるんです」



南国の花嫁 (TropicalBride)

URL <http://sayanoriko-art.jp/>
Facebook <https://www.facebook.com/sayanoriko>

んは動かない手が、キャンバスに向かうと自然に動く。絵を求めている人のために私の体が動かされると感じます。私の絵を見て笑顔になったり、涙を流して感動してくださっている方を見ると、誰かを癒せていることへの喜びと感謝が溢れます」。

どんな状態であっても、必ず希望の光はあると語るさやさん。絵を待つ人のために。見知らぬ誰かのために。愛と光を宿したその手で、さやさんは今日も絵筆を握ります。

<プロフィール>
●さや・のりこ
福智町在住。2006年に脊髄の異常で神経に障害が起こる難病「脊髄係留症候群」を発症。手足のマヒと闘いながら画家として活動を続ける。
第7回視覚芸術ユーロアメリカン展2012(場所:ペルー共和国クスコ市立美術館及び国立大学サンアントニオアパドのインカ美術館)特別招待作家として受賞。
国際博覧会「第7回視覚芸術ユーロアメリカン展2012」に出展した「南国の花嫁 (TropicalBride)」をペルー共和国クスコ市立現代美術館に寄贈。作品は永久保存となる。他、国内外で活躍の場を広げている。